

竹内先生を送る

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

76

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

1975-03-22

竹内先生を送る

*

竹内直良先生には、昭和十六年、本学高等師範部に出講されてから今日まで三十余年にわたり、西洋史を講ぜられた。戦後、文学部史学科創立とともに教授に就任され、一昨年には勤続二十五年の表彰を受けられたが、本年三月でいよいよ定年退職されることになった。すでに法政大学名誉教授の称号を授与されることが決定している。先生の特講「キリスト教史」は、古代・中世を隔年に連年講ぜられ、文学部でも特色ある講義として、近年は哲学科学生にも受講されており、来年度も本講義のみは続けていただく。先生は確固とした信念をもって教場に臨まれ、その豊かな人間味と厳しい態度は学生たちにも深い感銘を与え、卒業後も高風を慕われている。先生が今後益々御元気で御指導下さるよう祈念してやまない。ここに先生の御経歴・業績の一端を、西洋史関係の講師の諸先生の御寄稿とともに掲載させていただく。

竹内直良先生略年譜・論文目録

〔略年譜〕

明治三十七年十月十日 金沢市に誕生
 大正十一年三月 新潟県立長岡中学校卒業
 大正十四年三月 第四高等学校文科甲類卒業
 昭和三年三月 東京帝国大学文学部西洋史学科卒業

昭和四年九月 石川県立小松中学校教諭
 昭和八年三月 石川県立金沢第一中学校教諭
 昭和十三年四月 仙台陸軍幼年学校教官
 昭和十六年三月 陸軍予科士官学校教官
 （昭和二十年八月まで）
 昭和十六年九月 法政大学高等師範部講師
 昭和二十二年六月 法政大学文学部教授
 昭和二十四年四月 立正大学文学部講師
 昭和五十年三月 駒沢大学文学部講師
 法政大学定年退職

〔論文目録〕

「西洋中世修道院の写本事業」 昭和二八年一月 駒沢史学第三号
 「西洋中世初期における修道院と教会との従属関係」 昭和二九年三月 法政大学文学部紀要第一号
 「紀元七世紀におけるイギリスの宗教事情」 昭和三一年三月 法政史学第八号
 「コロンバアスとベネディクトゥス」 昭和三二年一月 法政史学第十号
 「ボニファシウスの政治的活動について」 昭和三五年一〇月 法政史学第十三号
 「カロルス大帝時代の教育と修道院学校の実態」 昭和三八年三月 法政大学文学部紀要第八号
 「アタナシウスとエジプト修道院」 昭和四四年二月 法政大学文学部紀要第十四号

「^{けやき}樺」に託して

清水 博

昭和二十四年四月、私立大学は国立大学に一年先んじて、新制大学に切換えられたと記憶している。その年から竹内先生のおすめをうけて、法政大学史学科の非常勤講師として、アメリカ史を二部で講義し、かつ通教のテキストを書くことになったと思う。その時たしか先生はわざわざ拙宅に足を運ばれて御依頼があった。後輩であっても仕事を依頼するのだから自身出向くべきであるとお考えからであったと思う。その後私が肋膜炎を患い、長期欠勤をした時もわざわざお見舞に見えられたし、また比較的近年もう一度ご来訪下されたことがある。しかるに私はまだ先生のお宅に参上したことがない。いかに僭越で礼を知らぬ後輩であることをこの文を書くことで思い知り、愕然としている所である。改めてそのことをお詫び申しあげなければならない。このような私が竹内先生について記すことは一層の失礼に当るかとおそれるけれども、敢えて申すならば、

「先生は一見瓢々乎としていられるが、洒脱というか、脱俗悟入の境地にあられるが、一面きびしい古武士の風格を内に秘めていられる」

というのが私の感懐である。

竹内先生を送る

しかも、その先生が私共の共通の師である今井登志喜先生のオールド・リベラリズムともいうべきものに、心よりの信頼をおかれているのではないかと思っている。

先生がなぜ西洋史、それも中世キリスト教の歴史を専攻されたのかについては伺ったことはない。けれどもこの撰択は先生の内にある広い視野と和魂漢才によって、西欧文物の一つの起源であるキリスト教を、大正から昭和初期にかけての歴史研究の主流であった文化史的展望の流れの中で、発展的に把握せざるようとしたものではないかと勝手な推測を試みている。そしてさらに先生の視野の中には西欧文化と日本文化という二つの比較研究が入ってきていると思うので、機会があれば是非それらのお話を伺いたいものと思っている。

話は別になるが、先般先生が拙宅に見えられた時、狭い庭に百年近く経た樺の木があるのをみられて「木があるのはいい」といわれてこの樺をほめられた。この樺という木は先生にも似た木であると思う。地面にしっかりと根を据えて太い幹は直立し、強風にも微動だにしないが梢は風を受けて柔軟であり、夏は日蔭を作って涼しく、冬は落葉して日照を妨げない、私はすつくと冬空に立上っているこの樺に定年を迎えられた先生をみるように思う。なにとぞこの樺のようにますますご健在で狂乱の世の中での確乎たる師表であられるよう祈念する次第である。

竹内先生のお人柄

小林 幸 輔

私は法政大学に勤めるようになってから十年になるが、その間竹内先生からいろいろな機会に感銘深いお話を沢山お聞きする事が出来、私の人生観確立の上にも忘れ難い恩人の一人である。先生は貴重な書画骨董品を沢山愛蔵せられておられる。お宅にお訪ねするといつもそれらの中からポツリポツリと小出して見せて下さって、その由緒等について懇切に説明して下さいましたが、その時先生の眼光は鋭く輝き、毅然たるその姿勢は真実なるもの尊厳なるものに対する深い静かな情熱を感じせしめられた。

昨年暮お訪ねした時は股代のものと思われる簋（穀物を神に供える時に使った器）を見せていただいた。これは九月京王デパートで開かれた中国古代美術展に出品された多くの同種の器物、及びそこに刻まれた書体との比較からも真物である事が、ほぼ間違いないらしい。また奥さんが実家からいただいて来たという幕末の書家貫名海屋（菰翁と号し、弘法大師以来の書家と評されている）の書も数点見せていただいた事がある。奥さんの実家は能登の飯田の庄屋（肝煎）で、貴重な古文書を沢山所蔵しておられるらしい。或時、襖の張替の裏打の為に出された紙が元禄以来の塩田の記録だった為、表具師に体よく持って行かれてしまった等のあきれた程鷹揚な田家である。しかし芸術に無知の私にとっても感銘深かったのは、現代日本の仏像作家としては第一人者である佐々木大樹氏作の阿弥陀如来の木彫である。ゆらゆらと立ち上る

香の煙を浴びながら静かな如来仏の姿に接した時私はすっかり神秘的な気持ちになってしまった。

ヒポクラテスは「人生は短く芸術は永し」といつているが、このように数多くの貴重な芸術品に囲まれながら激しい時世の移り変りを静かに達観しておられる先生の御生活は本当に羨しい限りである。

私は十年前先生からローマのおみやげとしてかわいいキーホルダーをいただいたが、その後の先生との御交誼を通して賜った数々の感銘は、現在の私にとっては何よりも人生のキーホールである。

竹内直良先生を送る

中 村 英 勝

私が非常勤講師として法政大学で講義を受けもつようになったのは、たしか昭和二十五年からであるから、今年でちょうど二十五年、四分の一世紀になるわけである。法政大学が新制大学として発足して間もない頃であり、戦後の物資欠乏のひどい時代であったが、当時の学生のうちには、白髪のお書生など、異色の人もいた。三十才を過ぎて間もない私のたいへん未熟な講義を聞いて下さったことは、今から思えば汗顔の至りであると共に、なつかしい思い出となっている。

こういうわけで、竹内先生とのお付き合いも四分の一世紀になるわけである、先生は私の大先輩に当る方であるが、後輩の私が

時にはわがままを言い、ご迷惑をかけたこともあるが、いつも大きな包容力をもって許して頂き、長い間気持よく勤めさせて下さったことは、全く先生のお人柄のおかげであり、今改めて深い感謝の念に堪えない次第である。今この拙文を綴るにあたり、先生の「直良」というお名前を表題に書いて思い当ったことであるが、「名は体をあらわす」というか、このお名前が先生のお人柄を象徴しているように思えてならない。法政大学では、今さら申すまでもなく、しばしば激しい学生の動きがあり、我々非常勤講師でさえ、貴重な講義の時間を割けと一部の学生に強要されて当惑することたびたびあった。竹内先生は決して学生に媚びるごとなく、常に毅然たる態度をもって学生を指導され、「保守反動」視されるようなことを全く意に介されなかった。これすなわち「直」である。「良」という文字が先生のお人柄をあらわしていることは申すまでもないが、これは単なる「お人よし」ということではなく、常に芯の通った「良」であり、すなわち「直」と結びついた「良」であると思う。

先生は金沢のご出身で、旧加賀藩士の出であるとうけたまわっている。江戸時代の武士の自己鍛錬は人間の「型」をつくる一つの道であったと思う。このような武士道の精神が明治時代に受け継がれて、日本近代国家建設の一つの「核」をなしたのではなからうか。大正から昭和になって、このようなものが次第に失われて、日本の国家体制はついに「無責任体制」となり、戦争の方向へ動いて行ったものと考えられる。明治生れの先生には「古武士の面影」が残っていたように思われる。今このような方が法政大

竹内先生を送る

学を退かれるのはまことにさみしいことである。長い間の勤務はまことに苦勞様と申し上げるほかないが、どうかご健康に充分留意されて、今後もながくわれわれ後輩をご指導頂きたいと思っている。

教養部学生への薫陶を偲ぶ

岩 永 博

竹内教授が定年によって、三〇年間にわたる史学科の教壇を去られるのは、名残惜しい極みですが、私としては、四半世紀にわたって教養部の学生へ注いでいただいた教授の御薫陶に対する感謝の念で一杯であります。

御承知のように、太平洋戦争後の学制改革によって旧制の法政大学予科が、昭和二四年に新制大学の教養部に改組されました。予科の西洋史担当者は当時まだ弱輩の私一人でありましたから、学務部と連絡をとった末、ようやく竹内教授に御無理をお願いして、一般教育の西洋史の授業の一部を担当いただいて、教養部の発足を飾ることができたものでした。当時教養部は川崎市木月（東横線武蔵小杉下車）にあり、教授が東横線沿線にお住いだっ

たことが、御無理をお願いできた幸運の理由でありました。爾来二〇年余教養部が本校に移転した後も教授は常に熱心に学生を薫陶下さいました。その他、通信教育の一般教育の歴史の科目の運営は最初から専ら教授の手で運んでいただいていた。

教養部が本校に移転した後、その運営が教養部に移されましたが、整った制度をそのままお譲りいただいたときは、教授の御尽力に感謝の念で一杯でございました。

× × ×

教養部の授業については、いろいろな想出が尽きません。教養部の歴史の授業は大教室授業（聴講生二〇〇〜二五〇人）で週二〜三回ありました。

「教養部の授業は大変だね……。しかし、いろいろな学部の子生に接するのはなかなか面白いよ」

と教授が何気なく洩らされる言葉に、こちらは多少ヒヤヒヤさせられました。史学科の学生をマン・ツ・マンで指導していられた教授から、早くもマスプロ教育の片鱗を現わしてきた一般教育の授業を嗜められたわけだからです。しかし、教授の真意は、むしろ文学部、法学部、経済学部と混じりあった雑多で奔放な学生たちに歴史を説く意義を重視されることにあったようでした。私は、「竹内教授のようなキリスト教思想に造詣の深い先生の西洋史の講義を聞いて、初めて、西欧文化の真髄に触れる喜びを感じ、西洋史を学ぶ意欲を深めました」

という学生に何人ともなく接しました。教授の広い視野と人間味の溢れる講義が、史学専攻でない学生の胸を深く打っていたことの反映にはかなりません。おそらく前後二〇年間に教授の授業に臨んだ学生は一万人を越えましょう。かれらの多くのものの胸中には、教授の授業の感銘が強く残り、人生の豊かな糧となっていることでしょう。

私の高校（旧制）以来の級友に横田整三君（専攻は東洋史）がいます。同君は入営一幹部候補生を経て、将校の身分で、予科士官学校の教官を勤めました。同君は終戦後学生生活に戻らず、朝日新聞社出版局に入って、最後には朝日ジャーナル、週刊朝日、アジア・レビューの編集長を歴任したせいで、口やかましいところもあるのですが、予科士官学校時代の竹内教授が、当時皇国史観の幅をきかす予科士官学校の教官室で、「全くそれらの風潮に超然として、肩をいからすこともなく飄々と行動していられた。腹が坐っていないければああはできない」と感服していました。この剛直で情味のある教授の人柄そのものが、まだ純朴な教養部の学生に多くの影響を与えたものと思います。

× × ×

移転前の教養部のあった木月は、まだ周囲に民家も少なく、稲田にとり囲まれた田園情緒が濃く残っていました。日当りのいい教授室の窓辺で、キリスト教思想や中世美術の諸問題を、教授の巧な話術のなかでお聞きした、くつろいだ時間の想い出は、われわれ教師にも忘れ難いものがあります。当時教養部には、禅の研究で知られた仏教学者の太田佛藏教授や、東洋美術に造詣の深い西洋哲学担当の山口論助教授などがいられ、教授も恰好な話し相手を与えられて、憩とくつろぎの時間を楽しめたのではないかと、その点で私は多少の負担の軽くなる思いがします。

実のところ、私は教務の雑務にかまけて、教授の専門分野で御指導を得る機会を逸しつづけてきました。昨夕の教授の「ローマ人の火葬と土葬」の慣習と「カタコムの話」を伺ってさらに反省

を強くしました。土葬・火葬の並存したローマの前期、キリスト教出現後の土葬の確立した時代など全過程は、オリエントにおける古代、ギリシア・ローマ時代、イスラム時代の慣習との関連と類似性を想起させます。キリスト教の宗教思想の私の専攻するイスラムの思想への影響など、お伺いしたいことは少くありません。

教授は、眼疾での御自由が少なくないようにお見うけしますが、身体は全く矍鑠としていられるのは私どもにとって何よりの喜びです。愈々健康に留意されて、一層われわれ後輩の指導に力を割いていただくよう、念願してやみません。(五〇、二、九記)

竹内直良教授退任記念講演会

本学文学部史学科教授竹内直良先生は昭和五十年三月三十一日をもって定年退任されることになった。ついでに先生の永年のご功勞と学恩に感謝するため、二月八日(土)、日本出版クラブ会館(東京都新宿区袋町六)で午後四時から記念講演会と懇親会が開かれた。

当日は安岡昭男教授と伊藤玄三助教授の司会により進行、第一部の講演会は、豊田武・主任教授の挨拶について「ローマのカタコンベ(地下墓地)」と題して、竹内先生の記念講演が行われた。内容は先生のご専門のキリスト教史研究の一部であるカタコンベにつき、かつて先生がローマを視察されたときのお話をまじえ幻灯を使用しながら明快にその起りや諸問題についての説明をなさ

竹内先生を送る

れ、多くの出席者に深い感銘を与えられた。記念講演が終つて花束贈呈(小林順子さん)が行われ河原正博教授の閉会の辞で講演会を終了。ついで六時より第二部の懇親会へ移った。

懇親会は、まず豊田教授をはじめ、三井文学部長、前主任教授岩生成一、前大学院講師森克己の両先生より、竹内先生の功績を讃える挨拶があり、ついで岩永第一教養部長の音頭による乾杯をはさんで、関野雄、中村英勝両先生。さらに高等師範部時代から旧制大学、新制大学、大学院の卒業生在学生の代表によるユーモアをまじえた懐かしい思い出話などがあり、和気藹々のうちに時間が経過した。終りに竹内先生から法政大学で教鞭をとられた戦



前から戦後三十四年間とくに史学科の創設やその移り変りなど貴重な裏話などをうかがうことができた。まさに先生の歩まれた道は法政大学の歴史であり、それはそのまま史学科の歴史であったといえる。最後に法政大学の校歌を合唱し、村上直教授の閉会の辞により懇親会を終了、八時二十分散会した。参加者七十名。

(講演要旨)

ローマのカタコームについて

竹内 直良

墓場を英語でセミタリ (Cemetery) と言う。ギリシア語の眠る場所の意から転じたものであるが、これに対するカタコーム (Catacomb) という字がある。地下墓地と訳す。然らばセミタリは地上墓地と言えるかと思われるがそうとも限定出来ないのであつて、地上の場合も地下の場合もある。一方カタコームは単なる地下の墓地を言うのではなく、地下に複雑なトンネルが掘られ、その左右の壁に丁度書庫の棚のような凹みが作られ、そこに死骸が並べてあつた。而もそれが紀元二、三世紀のキリスト信者の墓地 (ローマ市のものが最も大規模) に限って名づけられるのである。何故この様なものが現れたか。

古代ローマには二様の埋葬法があつた。土葬と火葬とである。土葬 (Inhumation) は死体を布で包み棺に納め、臭気を防ぐためにバルサムを入れる。棺 (Sarcophagus) は古くは木棺石棺であるが、後には極めて美麗な彫刻を表面に刻んだ大理石の棺も現れた。火葬 (Cremation) は死体を焼いて骨を骨瓶に入れる。この瓶を Urna Cineraria という。通常素焼で形体も大きさも現在の日本の骨瓶に似ている。但しこれも贅沢なものは大理石やアラバスターなどで作り、棺の場合と同様表面に立派な彫刻が刻んであつた。

さてこの土葬火葬の両者の中、時代的に古いのは火葬のようであつて、古代ローマの中心地フォルム・ロマヌムから最近 (一九〇二) 古墳が発見されたが (前九一七世紀間のもの)、骨瓶の層が下であり、その上層に木棺石棺の死体が埋められてあつた。(G. Lugli, The Roman Forum and The Palatine, p. 64) 但しこの二つの埋葬法は共に後世まで行われ、例えばスキピオの墓には石棺があり、英雄ユリウス・カエサルはフォルム・ロマヌムで火葬にされている。又同じ一族でも土葬火葬の両方が行われたことがあり、時代身分によつて孰れかが採用されたのではないようである。

尚、墓については古くから (共和政の初) ローマ市壁の外に設置することに定められ、市壁内には嚴禁された。故に現在アッピア道などに墓所の遺址が見られる。墓所の比較的良好に保存されているのはローマの西方二十キロ、テヴェレ (チベル) 河口のオスチアで、ここでは石棺を置いた場所、骨瓶を並べたコロンバリウム (Columbarium、鳩舎の意、骨瓶を安置した棚は鳩小屋に似ている) などが往時のままに遺されている。

紀元一世紀後半ローマにキリスト教が伝わってくるが、これは主としてユダヤ人による (パウロその他、ペテロは不明)。ところでユダヤ人は決して火葬はせず、すべて土葬である。その好例はイエスの埋葬であらう (マルコ一五ノ四五、四六その他)。このためキリスト教に改宗したローマ人はその影響をうけ、次第に火葬を廃して土葬となつた。丁度、元は土葬のみであつた古代の日本人が仏教を信ずるようになると次第にインド人の風俗の影響

をうけて火葬になったのと逆である（仏教の荼毘という言葉はサンスクリットからの転化）。この結果ローマのキリスト信者たちは死後における靈魂の交際を夢見、死骸が相互に相接近して土葬にされることを望むのである。生前有力な地位にあった信者が葬られた場合、或は殉教者が埋葬された場合、その死体に接してその奥に又はその下に葬られることになれば魂は天国に導かれるであらうと考える。かくて地下に縦横に複雑な通路が宛も鉱山の坑道のように掘られ入り曲りつつ奥へ奥へ、下へ下へと進んで行く。左右の壁には書棚のような穴が掘られ、その一つ一つの穴(Loculus)に死体が納められ、表面をコンクリートで覆い、死者の姓名或は祈りの句を刻みこむのである。この地下道は非常に奥深く、それが三層四層になり、夫々が又分岐して延々と進むこと全く迷宮の如くその壮大なること驚くべきものがある。ローマは地盤が非常に固いので相当に深く掘り下げても日本のように地盤落下や湧水浸水の心配はない。（このことが古代ローマに井戸がなく、遠方の山から直接清水を運ぼうとする上水道や汚水をチベル川に排水する下水道が発達した原因である。）故にカタコームの地下道も深いところでは地面から十九メートルにも達する（G. P. Kirsch, *The Catacombs of Rome*, p. 45）。道の諸所に小さな広場があり、アーチ形の天井を持つ小祭壇(Arcosolium)が設けられ、礼拝用の水槽があり、天井から小さなランプが吊り下げられる。こうしたカタコームを一つと見てローマの市壁外の周囲に三十四のカタコームがあるという（Kirsch, *op. cit.*）。紀元三世紀頃ローマのキリスト信者の数は約四万と言われるから、これらの人々が子孫相

繼いでカタコームに葬られたとすると、これが如何に広大なものであったかが推察される。現在一般旅行者に見物させるのは南方アッピア道の聖セバスチアン、聖カリストス、ドミチラの三カタコームで、その他市の東北のサラリア道のプリシラ、ノメンターナ道の聖アグネスのカタコームなども一般に開放している。

然し、キリスト教が三二三年頃公認されると地上に堂々と教会が建てられ信者の死体は教会の境内に埋葬されるようになったため、カタコームは次第に世間から忘れられ、遂にその存在さえも知られなくなった。そうして千余年経過した後、一五七八年偶然の機会にこのカタコームなるものが発見され、驚異の眼を以て見られるようになった次第である。

最後に一言したいことは、これらのカタコームは迫害中信者の集会や避難の場所であったとする説が広まっている点である。これは聊か無理のようで、この様な狭い陰惨な小空間に殊更集会したとは考えられず、当時司教の家で堂々と会合したようであり、又迫害中追跡された時これを免れんと無造作に一度カタコームに飛び込んだらそれこそ容易に出られぬ程内部は迷宮で真暗闇であるからその中餓死するに違いない。ランプをつけて自分の先祖の埋葬地へ行くのでさえ簡単ではなかったと思われる。勿論集会や避難に全く用いらなかったとは言えぬまでも、それらのためにこの様な希異な地下道が出来たとは言えぬようである。とかく誤解し易いがカタコームはあくまで二、三世紀ごろのキリスト教徒の墓地であったと考えてよいのではないかと思われる。